

# 第46回教育美術・佐武賞 選考の経過と選評



## 選考の経過

教育美術・佐武賞も今年で第四六回となりました。三月の未曾有の大震災のため、三月末の締め切りを一ヶ月ほど延期しました。東日本からも含めて、計十四編の応募がありました。いつもにも増して困難な状況下、論文をまとめ応募いただいた先生方に心からの敬意と謝意を表したいと思います。

美術教育の現状をどのように捉えるか、その現状認識から何をなすべきかなどの基本的な考え方と同時に、それぞれの論文について、具体的な実践内容や現場へのメッセージとしての意味など、多様な観点から委員が意見を交換しました。その結果、教育美術・佐武賞の一編と佳作賞の一編を決定しました。

## 選評 (第46回 教育美術・佐武賞 選考委員)

- 佐藤 康宏 東京大学教授
- 荒木 照子 岐阜聖徳学園大学教授
- 加藤 修 千葉大学教授
- 辻 政博 前東京都図画工作研究会会長
- 林 耕史 群馬大学准教授
- 藤原 和幸 奈良学園小学校校長



藤江 充  
財団法人教育美術振興会理事  
愛知教育大学教授



荒木 照子

岐阜聖徳学園大学教授

応募論文のほとんどすべてに共通していたのは、子どもの美術的活動を人間の根幹の育成、人間性の形成・向上を目指していることでした。十四編の中でもその思想が極めて新鮮な視点、明快な論旨で語られていたのが片岡氏の論文でした。幼い子どもを対象とした研究なので、本誌の読者の立場を考慮したのですが、むしろ美術教育に携わる者の誰もが人間初期の造形的体験がその子の内面にもたらすものについて目を向けて欲しいと考え、教育美術・佐武賞に推しました。親と応募しながらする描画活動が、「将来遭遇する危機において、本人を支えるイメージとなる」のでは：との考えも含めて、幼児体験とその教育作用の関係を長いスパンで見ようとする視座の取り方が、特に輝いて見えたのです。

佳作賞の高野氏の論文は、中学校で美術の時間が削減されたのなら、むしろ積極的にほかの教科と連携していこうという戦略の提示がよかったですね。もっとほかの実践例が見えたのは、子どもの美術的活動を人間の根幹の育成、人間性の形成・向上を目指していることでした。十四編の中でもその思想が極めて新鮮な視点、明快な論旨で語られていたのが片岡氏の論文でした。幼い子どもを対象とした研究なので、本誌の読者の立場を考慮したのですが、むしろ美術教育に携わる者の誰もが人間初期の造形的体験がその子の内面にもたらすものについて目を向けて欲しいと考え、教育美術・佐武賞に推しました。親と応募しながらする描画活動が、「将来遭遇する危機において、本人を支えるイメージとなる」のでは：との考えも含めて、幼児体験とその教育作用の関係を長いスパンで見ようとする視座の取り方が、特に輝いて見えたのです。



佐藤 康宏

東京大学教授

応募論文はどれもおもしろく拝読しましたが、教育美術・佐武賞に選ばれた片岡氏の論文を最も高く評価しました。幼児の家族との関わり方をよく観察することを通じて、人はなぜ、どのように造形をするのか、という根源的な問題にまでつながっていきそうな事象を論じています。単に文体が論文調というだけでなく、事例に対する的確な考察を伴う学術論文のスタイルを持つという点でも傑出していました。

たかったのと、考察が実践と乖離した叙述になっているのが惜しいと思います。選にはもれましたが、鑑賞と創作とを結びつけようとする五十嵐氏の提案は、造形が既成の造形を模倣することから始まるという一般的な現象を教育の中に生かそうとする試みで、可能性を感じます。いかなる効果を生んだのか、途中から叙述がわかりにくくなるのが残念でした。森坂氏は、偶然に生まれた形から何かを作り出す、美術史では唐代に遡る造形法の実践ですが、報告にとどまっているという感じを受けました。応募論文全体について、やってみたことを反省し、考察を深めるという作業がもっと展開されていたら、さらによくなるような気がします。





藤原 和幸  
奈良学園小学校校長

多忙を極める学校現場において、美術教育に関する論文や報告として、まとめようとする熱意に対し、深く敬意を表します。

教育活動における研究は、望ましい子ども像の具現化に向けた仮説や指導目標の設定、子どもの育ちを創造する作業であると考えます。そして、これら一連の実践活動や実際の手応えが、教育に携わる人だけが感じられる醍醐味といえるのではないのでしょうか。

研究成果について客観性や一般性を担保するため、実証や効果の検証を重ね、事前と事後の変容など明らかになったことを、冷静に、淡々ととらえてほしいと思います。その積み重ねによってこそ、真実が見えはじめ、真理に迫ることになると思います。

今回の応募論文は、実践報告としての論文が多かったようです。

子どもたちに付きたい学力や能力、資質について、仮説や手立てを明らかにし、活動中の様子や完成や完了に向けた流れ、作品や幼児・児童・生徒たちの感想等がもっと示されても良かったのではないかと思います。

美術（図画工作）は人の心や感性という本来見えない内容に深く関わる教科ですが、広く世に問いたい、確かめたいと考えた時には、証拠に基づいてものを言うという科学する作

業であってほしいと願うところです。

今回受賞された論文について講評させていただきます。

片岡杏子先生の論文では、幼児表現活動行動について、私情を交えず観察し、見たこと、したこと、聞こえたことを丁寧に記録し、論を展開されていました。ただ、それだけに、ケロググ等幼児表現の先行研究を見るような、幾ばくかの既視感を感じてしまいました。が、先行研究の時代とは視覚的環境が大きく異なる現在にあってこそ、このような、時代における地道で誠実な研究が求められるのではないかと考えます。

また、高野由美子先生の論文は中学校における教科としての存在の危うさから、他教科と組み合わせにより、有用性有効性を明らかにしようとしたユニークな発想が光りました。ただ、このことよって、教科美術が単独で残れなくなるような危険を招くことのないよう、扱いは細心の慎重さを求めたいところです。

人の育ちに関わる美術について真摯に考え、指導力に優れた先生方が益々増えてほしいと心から願います。それが、美術教育の大切さを訴え、広く知らしめる最も有効な手立てだと思っております。



林 耕史  
群馬大学准教授

「子どもの表現をよく見よ」、「子どもが表現したいことは何か読み取るように」と言われることがあります。しかし、それらは往々にして指導方法としては具体性を欠くことが多く困惑するところです。その部分に具体的な指針として本論が位置付くとも言えるでしょう。しかも、作品や造形行為だけでなく、他者との応答による関係性のなかで見ることが大切であることがわかります。本論では、幼児にとつて、とりわけ「親」の位置が重要であると述べられますが、それは、教室にお

ける「教師」に置き換えて読むこともできるでしょう。ただ、結論に至る論考において、「物語」の意義や必要性を述べる考察が弱くなっていることが惜しいと思いました。

他の応募論文も、子どもたちの具体的な造形活動の姿が論拠として語られ、その実践記録の貴重さと筆者の熱意が伝わりました。独自教材の開発や指導の試みなどの意欲作、長年の実践記録や学校ぐるみの取り組みの集大成などの力作がありました。しかし、どのような問題意識が研究の動機になっているのか一般的であったり、どのような実証方法によつて考察するのか妥当性を欠いたりするものもありました。焦点を一層絞った論考が期待されると思います。

本賞は、所謂、学会論文とは性格を異にしますが、全体構成や論述方法、実践や文献の適切な提示の仕方などは、研究内容と併せて検討されると良いと思います。





辻 政博

前東京都図画工作研究会会長

造形美術教育の事象から「問い」を設定し「分析」し「回答」する手続き、すなわち、「テーマの設定」「分析（仮説・対象・基本概念・方法etc.）」「結論」の手続きが明快で、説得力のあるものを上位に推薦した。

教育美術・佐武賞を受けた片岡杏子氏の論文は、参加作品中、飛びぬけており強く推薦した。幼児における描画活動の意味を、身体性を基盤としつつも、特に「身近な他者との応答」を「物語」の視点からとらえ、「描く主体である（わたし）」の形成へとつなげていく考察は、見事である。現在の情報環境のなかで、自己を支えるイメージを育成するという観点もよい。現場に流布する機械論的、規範収束的なまなざしを根本的に批判する視座をもつと考えた。

さらに、個人的には、幼児のみでなく、児童、生徒、老人等の各発達過程における描画活動の考察も期待したいところである。また、こうした論が広がるために「観察の記述の仕方」に関して、読者によって恣意的と判断されなためための戦略を練られてはいるだろうか。

佳作賞となった高野由美子氏の論文は、現在の「美術科」のおかれた危機的な状況を打開しようとする心情に満ち溢れた作品で、問題提起を発するものとして推薦した。こうし

実践されているさまざまな基礎的教育題材に加え、教育現場において特に現在向き合わなくてはならない側面を提案された。

報告内容は他教科との連携などを含む実践例であるが、それは授業時間数減少に伴う対処法としてではなく、美術がもともと持っている多領域との連携を可能にする能力についての前向きな提案である。美術とは、曖昧なイメージの世界を繰り広げるだけでなく、制作者が自己の考えを他者に伝える手段であるので、社会構造が複雑化し人間の関係性もそれに比例する現代においては、描写と文字とのコラボレーションは自然な流れである。さらに、他領域と連携し制作力と思考力のバランスを図ることで、生徒が自己を見つめることを促している今回の報告は、自己形成を目的とする義務教育において、人間育成には欠かせない教科としての役割も示唆している。

た認識から出発し、美術の教科性を問いつつ、それを社会的な関係性を媒介するものとしてとらえ、他教科との関連のなかで、よりその存在意義を展開できるといふ視点は、読者の議論を呼ぶところであろう。また、切実な心情から出発した文体は魅力的である。けれども一方で、終末部での論述の曖昧さは否定できない。高野氏の伸びていくエナジーに期待したい所存である。

さて、応募論文の全般的な傾向として、マインスの視点から見ると、次のような点が見られた。

①経験豊富な実践事例をもとにしているが、総花的で論証の手続きが不明。たんなる報告に終始している。②一方で、問いの設定や手続きはよいが、事例が一般的で魅力に乏しい。③観念的、思弁的、美学的で、現実性に乏しい。

それぞれの応募論文には、それぞれの魅力が内在している。それを「明るみ」に出すために、実践指導とは、また異なる「努力」が必要である。かといって、論文の記述の仕方のみ達者でも意味をなさないのである。教育美術・佐武賞は、「実践」と「論」をつなぐもので、そこに明日の造形美術教育をつくりだしていく価値があると考える。応募された皆さんの努力に敬意を表したい。



加藤 修

千葉大学教授

今回の応募作品では、教職現場からの切実で具体的な思いが反映した作品が多くなっているように感じた。審査論文「佐武賞」の応募形式が「報告書または論文」という表現になっていることからわかるように、美術教育を直視する現場の発言を広く求めながら、守るべき価値や進化させるべき事柄について互いに共有しようとする目的に込めて頂いた結果と受け止めた。「美術教育」の読者が自己の活動と重ね、現実的に今後の示唆となるような内容を選考したいと私は考えた。

今回、教育美術・佐武賞を受賞された方は、家庭教育研究所という枠組みであり、評価という観点もなく、参加対象も学校と比較すると極少数であることや、もともと造形教育の価値について好意的に理解されているご父母が子どもとともに参加している状況と異なる。つまり児童生徒またそのご父母を含め、造形教育に対しての関心・理解の度合いも様々な状況から彼らに興味関心を与え、造形活動を通し人間育成をするために必要な題材の意義・内容や、その方法を吟味する学校教育としては、比較の尺度に違いがあると感じた。

私は学校教育という立場から、佳作賞の報告書について選評を述べたい。筆者は、平素

